

## 備後鞆の浦の『伽婢子』

沖縄県出身の学生が地元でこんな昔話を採取しましたと言ってレポートを提出した。読んでみると、完璧なかたちの「笠地蔵」である。驚いて民俗学の先生にお伝えしたところ、沖縄は一年を通じて雪の降らない所なんですけどね、と首をかしげられた。

伝承と称する類にも実はさまざまな出自を持つものがあるらしく、本稿で採りあげる広島県福山市に伝わるという中納言藤原基頼卿の一件も、どうやら書物を出どころとするものようである。

\*

『伽婢子』は翻案小説である。かつて『伽婢子』に語釈

渡 辺 守 邦

を施す試みをしたことがあったが、註解に<sup>注1</sup>当って翻案の妙を解明する一助にと、原話の利用箇所すべてを書き下し文で掲出するように心がけた。『剪灯新話』のみ特別扱いして和刻本の『剪灯新話句解』（慶安二年田原仁左衛門板）を影印によって巻末に付載したがそれでも脚注のスペースは狭く、意を達するにはほど遠い結果に終わった。

本稿はそんな舌足らずの注を補うつもりで、巻三4「梅花屏風」から「中納言藤原基頼卿」「狐崎」「むかし淳和天皇の后出家して」の三つをとりあげ考察を加えてみたものである。それぞれについての個別の考察であるからオムニバス的に三部に分かれるはずであり、事実、ばらばらに論考は進んだのであるが、終わってみると個別であるはずの三つが自ずと融合して、思いもかけなかった事実を浮びあ

がらせることとなった。その事実が何であったのかを明らかにする前に、巻三4「梅花屏風」の梗概を述べておく。説明がスムーズになるようである。「梅花屏風」は大内義隆の招きに応じて周防山口に下向にした中納言藤原基頼卿とその北の方の波乱に富んだ半生の物語であって、別題を「藤原基頼卿海賊に逢事」とする。

周防国に下った中納言基頼卿は陶晴賢の反乱に巻き込まれる。船を調達して安芸忠海（広島県三原市忠海町）の港まで逃れたが財宝に目のくらんだ舟人は中納言を海に突き落として、母港の能地（三原市幸崎町能地）へと船を進める。北の方は舟人のもとを逃げ出して都へ向けて走り、夜明けにたどりついたのが狐崎のかれの山麓にある尼寺であった。ここはむかし第五十三代淳和天皇の後出家し給い如意輪信仰を広めようと開いた寺、北の方はこの寺で出家し梨春尼と名乗る。年経てこの寺に梅花の屏風が施入される。見れば奪われた財宝の一つ、基頼卿自筆の屏風であった。梨春尼が新たに書き添えた和歌が評判となって基頼卿を庇護する輓の奉行の耳に入り、夫婦は再会を果したものの京に帰る夢は叶うことなく二人ともにこの地に果てたのであった。

この一話の原拠は『剪灯余话』巻四4「芙蓉屏記」であり、舞台を天文永祿ごろの備後国鞆の津に借りて翻案した

虚構である。さて先にペンディングにした補注が浮びあがらせた意外な事実とは、中納言基頼卿と北の方とのこの哀話がご当地の実話として備後の輓に伝わることであり、さらに虚構が実話に変容するからくりが明らかになったことである。

なお右に述べた経緯により、冒頭に新日本古典文学大系『伽婢子』の脚注をコラムに囲んで掲出するという、論文としてはいささか風変わりな形式を採ることとなった。

中納言藤原基頼卿（八六ページ注一）。

京都將軍家譜・下・義輝に「中納言藤原基頼從二位藤親世等剃髮逃走」とする人物の名を借りるが、これは陶晴賢謀反のとき山口にあって落髪した（公卿補任・天文二十年）という権中納言藤原（持明院）基規を誤ったものか。

この一話のヒロイン梨春尼の夫中納言藤原基頼の人物設定についての注である。「京都將軍家譜」とは林羅山・春斎著『將軍家譜』のうち、京都將軍すなわち足利將軍家代々の部のことで全二卷二冊、義輝は第十三代將軍である。周防山口に下向して陶晴賢の突然の謀反に遭遇した公家たちの混乱ぶりは『伽婢子』に、

此時にあたつて、前関白藤原尹房公、前左大臣藤原公頼公は、山口の城をにげ出るに度をうしなふて、ながれ矢にあたりて薨じ給ふ。従二位藤原親世は髪をそりてのがれ出給ふ

と描写されるが、これは浅井了意の著作『本朝將軍記』にある次の描写に重なる。

京都の乱をのがれて公卿殿上人おほく義隆を頼みて城中におはしけるを、今此反逆にあふて前関白藤原尹房、前左大臣藤原公頼はのかれ出るに度をうしなふてころされ給ふ。中納言藤原基頼、<sup>注2</sup>従二位藤原親世は髪をそりてのかれ出給ふ。

そしてさらに、『本朝將軍記』のこの描写にも出所があった。

アツテノルニ  
会ニ此乱起ニ而前関白藤原尹房前左大臣藤原公頼被ル害セ。  
中納言藤原基頼従二位藤原親世等剃髮逃走。

と記す『京都將軍家譜』である。

ここで注目されるのは、公家衆の数が『京都將軍家譜』

と『本朝將軍記』の四人から三人へと減っている点であろう。具体的には中納言藤原基頼の名が『伽婢子』の先の引用には抜けている。藤原基頼が『伽婢子』に欠けているわけではない。彼は椿事に周章狼狽する群像の一人としてではなく、北の方、家人、財宝を損なうことなく混乱の山口を脱出する冷静沈着な人物に変身して、原話の『剪刀余話』巻四の崔英の役柄を承る。

さて、ここまでが前置きである。藤原基頼なる人物にはもう一つ問題にすべきことがある。他の公家衆は『公卿補任』天文二十年の項に次のように記述され実在が確認できるが、基頼のみその名を確認することができない。

前左大臣従一位 二条藤原尹房<sup>六十五</sup> 前関白。准三宮。八月廿九日於周防国義隆卿没落之冠御生害云々。号後大柴金剛院関白。

前左大臣従一位 三条藤原公頼<sup>四十五</sup> 八月廿九日於周防生害云々。号後龍翔院左大臣。

非参議 従三位 藤親世<sup>八十五</sup> 右兵衛督。九月日於防州落髮云々。

藤原基頼その人は確認できないのではあるが、それらしい人物を『公卿補任』の天文二十年の項に見出す。次のように記される公卿二人である。

権中納言正三位 持明院藤原基規<sup>六十一</sup>

八月日於防州義

隆卿没落之尅落飾云々。

非参議

二条藤原良豊<sup>十六</sup>

左中将。正月六

日叙正三位。八月二日於長門国自害云々。義隆卿同所。

物語がもう少し進行すると、海賊に舟を奪われて海中を潜って生き延びる水練の達人とされるところから、二人のうちの十六歳の公達藤原良豊に軍配を上げたくなるのであるが、水練もまた『剪刀余話』の崔英の得意わざなのであって『伽婢子』の段階における創作ではない。

ここではむしろ、

中納言藤原基頼

権中納言藤原(持明院)基規

という類似に着目したい。藤原基頼はすでに述べたように

『公卿補任』には著録されないものの、実在した人物である。ただし室町時代の人ではなく、道長の子藤原頼宗の孫、初めて持明院を家名として名乗ったことにより後世に知られる。「基頼」「基規」の混淆には文字の類似とともに持明院家という背景が考えられる。

加えて周防山口において権中納言藤原(持明院)基規を襲った悲劇は、まさに奇禍として人々の心に止まったらしく、さまざまな異伝を残す。『義残後覚』もその一例である。持明院入道一忍軒藤原基規は愛娘を大内義隆のもとに嫁がせて十年、思い立って山口に下向し、この騷擾に巻き込まれて孫たちとともに自害して果てたとする(巻五八「一忍軒并北御方最後の事付冷泉隆豊最後事」)。大内義隆の北御方は京より下った公家の姫ではあったが持明院家の出身でない。基規のこの時の下向は四度目であり、度重なる山口行は王朝趣味の義隆から郢曲の伝授を懇望されてのこと<sup>注3</sup>というのが史実らしい。

すでに述べたように藤原基頼の登場は『京都將軍家譜』あるいはそれ以前の段階における過誤であり、基頼を持明院の家系に連なる一員と知る碩学の素養がほとばしった結果であろう。この過ちに『伽婢子』の著者浅井了意が気づいていたか否かを確かめるすべはないが、事変に遭遇して以降の行状は原話の『剪刀余話』巻四の崔英の役柄に重

ね合わせながらの創作であるから、モデルであったかも知れない権中納言藤原基規と名前を入れ換える必要はない。ここでは悲劇のヒロイン梨春尼の夫が天文年間には存在しなかった人物名を名乗っていることを確認して論を先に進めることにしたい。

### 狐崎（八九ページ注一三）

備前国沼隈半島先端の岬。広島県福山市鞆町後地（うしろ）に当り、能地から海上九里。「ともよりあぶとのくわんおんへ壱里。付、右の間にきつねさきと申山はな有」（太道中名所鑑・下）。

戦乱の山口を脱出した中納言藤原基頼卿は安芸国忠海に到着して、折からの仲秋の名月を愛でて盃を回らす余裕を持つ。その夜、舟人は中納言と家人を海に突き落として、能地に船を着ける。北の方の命を助けたのは息子の嫁にするためであった。北の方は舟人のもとを逃げ出し、たどりついたのが狐崎の尼寺であった。

この狐崎を『大日本地名辞典』『角川日本地名大辞典』『日本歴史地名大系』『全日本地名辞典』など手許の地名辞典に探し出すことができない。かろうじて『新日本地名索引』<sup>注4</sup>に次のごとき記事を得た。

### きつねざき

1 狐崎	矢幅	矢巾町	岩手	一四一度〇八分
2 狐崎	西野	米山町	宮城	一四一度一三分
3 狐崎	真坂	一迫町	宮城	一四〇度五九分
4 狐崎	寒川	山北町	新潟	一三八度二六分
5 狐崎	茶屋町	灘崎町	岡山	一三四度五〇分
6 狐崎	常石	福山市	広島	一三三度二二分

この書は国土地理院の二万五千分の一の地図に載る地名のインデックスであって、各項、上から順に、地名漢字・図葉名・市町村名・県名・経緯度が記される。「図葉名」とは二万五千分の一の地図一葉ごとのタイトルのことである。たまたま参照したのが一九九三年版であったので市町村名に修正を必要とするもののようである。たとえば〔5〕は平成の大合併により岡山県児島郡灘崎町から岡山市南区灘崎町に変わった。『新日本地名索引』にはこの他に、

### きつねがさき

7 狐崎（駅）	清水	清水市	静岡	一三八度二七分
				一三五度〇〇分

がある。鎌倉武士の梶原一族が減じた地として史書に名を留めるが、行政区画の名称としては存続せず、現在は駅名

（静岡鉄道狐ヶ崎駅）と郵便局名（清水狐崎郵便局）とに残るのみである。なお藤原基頼卿北の方が駆け込んだ草庵の所在地「かれの山」に関しては現今の地図や地名辞典の類に何の手がかりも見出さない。

右の七つの狐崎のうち、北の方のたどり着いた地として検討の対象になりうるのは山陽道にある〔5〕と〔6〕との二つであろうが、能地（東経一三三度〇二分、北緯三四度二〇分）を基準に計算してみると、〔5〕は能地からの直線距離が二十里を超える。これは一晚の道のりとしては長きに過ぎるであろう。同様に計算するとき能地から〔6〕までの距離は八里余、これもいささか遠い。原話の『剪灯余話』に基頼の北の方に当る崔英の妻王氏の逃亡を「走ルコト二三里」とする。慣れぬ夜道を高貴な女人が歩き通せるのはその程度の距離だったかも知れない。だが、二里や三里の道のりでは追っ手の容易に見見するところである。そんなこんなを勘案して、二万五千分の一地図「茶屋町」に載る狐崎ではなく、「常石」の狐崎をもって「かれの山」の所在地と認定することにした。現在の行政区画の名で呼べば、広島県福山市鞆町後地、瀬戸内の潮待ちの津あまたのうち、風光明媚をもって知られる鞆の浦から二キロほど南西に寄った岬である。

このようにして狐崎を鞆町後地の海浜に指定することと

なったのであるが、当時の人々にとって狐崎の探索はそれほど難しい作業ではなかった。たとえば吉備路を行く旅人は、次のような案内の載る書物を懐中していた。

▲ともよりあぶとのくわんおんへ壱里

付、右の間にきつねさきと申山はな有。きつねさきのはなの上のかたに瀬あり。并、きつねさきより三町ほど下に、かれいと申山あり。右の山はなも四五町ほどをきのかたに、あぶらいしと申瀬有。

書物の名は『増補大道中名所鑑』<sup>注5</sup>（延宝七刊）、その「西国船路道中記」という章の一節である。「西国船路道中記」には京都伏見を出発して淀川を下り、さらに大坂の伝法から薩州鹿児島に至るまでの行程が詳述される。

右の引用は、備後国鞆の浦を船出し針路を南南西にとつて阿伏兔観音（の岬）まで、その間海上一里の記事であり、上下は上が大坂方面、下が西国方面を指す。狐崎を鞆と阿伏兔観音との間に存在する「山はな」と説明するが、『邦訳日葡辞書』に「ヤマバナ 外の方へ突き出ている、山並みの先端」とある。この「山はな」を二万五千分の一地図「常石」に載る広島県福山市鞆町後地の狐崎、すなわち『新日本地名索引』の〔6〕に当てることに異論はなかる

う。それだけではない、「西国船路道中記」にはさらに『新日本地名索引』にも載らなかった「かれいの山」への言及があり、「きつねさき」から西へ三町の地と位置を特定する。

〔図版1〕として載せた二万五千分の一地図「常石」を閲するとき、軀から狐崎までの海岸は荒磯が断続するが、岬を回ると小さな砂浜が見えてくる。地図に記述はないが、この砂浜が小室浜海水浴場である。海岸に建物二棟の表示があるが、これはヨット関係の施設で、小室浜はヨットマンのメッカとして知られる所らしい。その先に室浜と記した集落がありそのあたりも海岸が砂地をなし、二つの砂浜は海にせり出した小高い山塊に隔てられる。そして四百メートルほど沖の方に「油礁」という岩礁が頭を出し、灯標の記号が添えられる。この岩礁が「西国船路道中記」に、

……かれいと申山あり。右の山はなも四五町ほどをきのかたに、あぶらいしと申瀬有。

とする「あぶらいし」の瀬であろう。

ここで『増補大道中名所鑑』の記述を二万五千分の一地図「常石」の上にトレースしてみよう。〔図版2〕である。狐崎・油礁（あぶらいし）を底辺に、狐崎から三町、油礁か

ら「四五町（いま仮に四町半として計算する）」の距離が交わる地点を頂点とする三角形を地図上に描いてみる。すると頂点には、小室浜と室浜とを隔てる山塊の波打ち際が当る。標高四十メートル余の、ポニョとソースケが立てこもった崖の上の一軒家よりほんの少し高い程度のこの山塊が「かれいの山」の正体ということになるであろう。なお念のために、狐崎かれいの山もとの草庵の情景を『伽婢子』巻三4に求めるとき、

しかるにこの寺は浜ちかくして波の音さはがしく、人影まれに蓬葎しげりつゝ、たま／＼友とするものは、うしろの山にさけぶ猿のこゑ、前なるうしほに千鳥のなく音、松ふく風、岸うつなみ、これより外にはこと、ひかはすものなし。

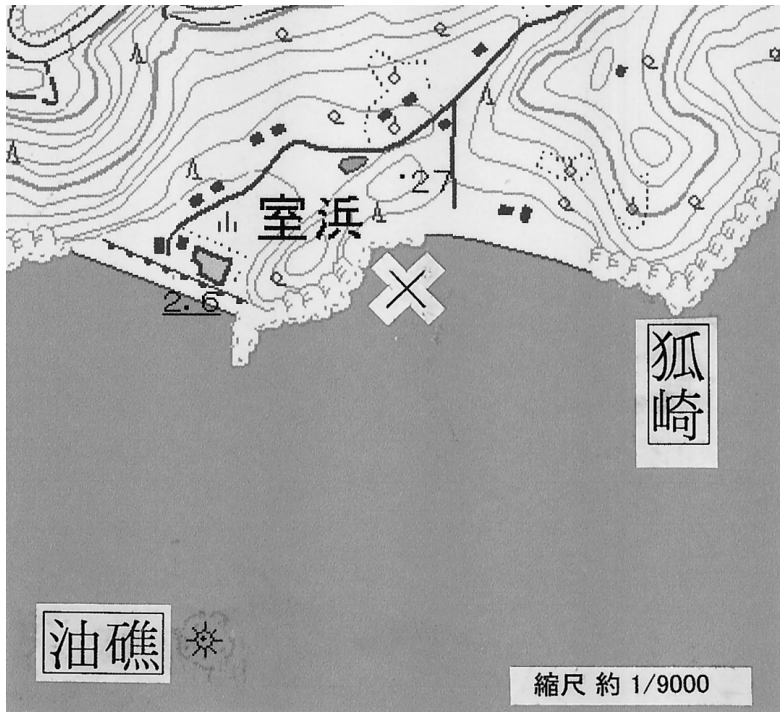
と、前後を海と山とにはさまれた幽邃の地とされ、挿絵もまた、さざ波に根方を洗わせる磯馴松と迫りくる山並みに挟まれて立つ草葺きの門を描き、言葉を交わす尼公と上臈とを配する。

かくして紆余曲折の末、「狐崎のかれの山」の正体が明らかになったが、この程度のことは当時の旅人の常識であったことを次の引用が証する。

〔図版 1〕



〔凶版2〕





ともよりあぶとの観音へ 壱里

▲ 城有 是より三里をく 福山の城あり 此次山の出崎に 岩山有 其上にあぶとの観音立給ふ 右の間に きつねさきといふ山はな有 きつねさきはなの上の方に 瀬有 并 きつねさきより三町程下に かれいといふ山有 右の山のはなも 四五町ほどをきのかたに あぶらいしといふ瀬有

これは『諸国案内旅雀』<sup>注6</sup>（貞享四刊）巻七所収の狐崎・かれいの山に関する記事である。この種の出版物では実用書の常として、版種を代え版元を違えて記事が継承され、時代の共通認識となったものごとくである。

しかし時移り時代が変わって「かれいの山」の存在が人々の意識から薄れ、地名辞典や地図の上から消えることとなった。その理由は交通手段に変化が生じたゆえか、あるいは別稿<sup>注7</sup>にも述べた〈知恵蔵〉すなわち時代の共通認識を支える書物に変化が生じたゆえか、にわかに定めることは難しい。

ただ、忘却はみごとなまでに完璧で、記憶の片鱗すら備後鞆の地に残さなかった。そしてその事実が中納言基頼卿と北の方の伝承に以下に述べるような混乱をもたらしたのであろうことは疑いない。

むかし淳和天皇の後出家して（九〇ページ注一五）  
以下は元亨釈書十八、本朝神社考五、本朝列女伝九  
等に伝える如意尼の伝承を備後鞆の海浜に立つこの尼  
寺に付会する。また如意尼の伝承は、ほぼそのまま狗  
張子巻二「武庫山の女仙」に用いられる。

備後国狐崎のかれい山麓にある尼寺に迎え入れられた北の方は、寺の由来を庵主から聞かされる。それは次のような物語であった。

此所はむかし淳和天皇の後、出家して武庫の山にこもり、如意比丘尼と申き。此人修法のいとまこ、に來り、浦嶋子が箱をおさめ、空海和尚をもつて供養したまへる寺なれども、時世うつりしかばかすかなる跡となり、其時つくり給へる桜木の如意輪観音の胸のうちに、かの箱をおさめられ靈仏にておはしけるに……、

これは『元亨釈書』の如意尼の伝に似る。淳和天皇第二の後が内裏を遁れ、出家して如意尼と名乗り摂州武庫の山中に一寺を造営して、空海作の桜木の如意輪観音を本尊に修行に励んだとする一話が『元亨釈書』巻十八に載る。空海

作の如意輪観音はそのまま武庫の山すなわち兵庫県西宮市甲山町の摩尼山神呪寺に現存する。神呪寺はこの如意尼ゆかりの如意輪観音を本尊に祭り、日本三如意輪観音の内に数えられて現代に至るまで信者を絶やすことがない。

『伽婢子』巻三4は備後狐崎の寺庵を、如意輪観音を信ずることの厚かった如意尼が余暇を過ごすために営んだ別業とする。この設定は、もちろん原話の『剪灯余話』にヒロイン王氏の逃げ込んだ聖域を「尼院」とし、王氏は観音を厚く念ずる日々を送ったところと即したものである。だが、なぜそれが狐崎のかれの山麓という場所であなければならなかったのかと考えると、唐突という印象を払拭するのはむずかしい。如意尼が備後の別業に遊んだという記事は『元亨釈書』には見あたらない。あるいはこの地に甲山神呪寺の末寺にあたる如意輪信仰の寺でも存在したのであろうか。

そんな不審に、備後地方の地誌の類に見出した次の記述が示唆を与えてくれるものである。

医王寺 桃林山。真言宗明王院末。中興ハ真永上人享禄中再興ナリトモ。空海草創ト云。

六郡志云、むかし能登坂の下に慈眼寺といふ一刹あり。今廃して此寺に併す。基頼の墓は彼慈眼寺にあり

しよし（『福山志料』二十五・頼津<sup>注8</sup>）。

桃林山医王寺は頼の高台に位置し、港と市街を一望のもとに納める風光によって観光客に知られる。『福山志料』は菅茶山・鈴木宜山等の編、医王寺には廃寺となった慈眼寺が合祀されるが、慈眼寺には基頼の墓が祭られていたという伝承が残ると「六郡志」を引用しながら言う。この記事にあつて、基頼という人名に目がとまる。『伽婢子』巻三4で、かれの山の麓にある、甲山神呪寺ゆかりの庵室に助けを求めた女人の夫も名前が基頼であった。女人すなわち梨春尼の夫、中納言藤原基頼卿の墓が実在した、というのである。その点に関して『福山志料』の叙述はあまりにも素っ気ない。それゆえ史料を代えることにより、もう少し踏み込んでみることにしよう。

次に引用するのは、同じく福山地方の地誌『西備名区』である。

医王寺 桃林山 明王院末寺

開基、宗祖空海草創。中興、真永上人。其先、能登原坂に慈眼寺と云真言寺ありし、其開基は宗祖にて、天文の頃迄は尼寺にて、可霊山慈眼寺と云ひし。其頃中納言基頼卿、陶か難を遁れ、夫婦わかれ／＼になり

給ひ、基頼卿は姿をやつし、鞆津の宰に寓居し給ひ、御台所は尼となり、慈眼寺に閑居ましまし、後、夫婦再び廻りあひ給ひし。其事の跡は慈眼寺の条に委し。天文年中庵寺となり居しを当寺に合すと云ふ〔西備名区』卷二十三・沼隈郡十二・鞆之<sup>注</sup>三三〕。

予想したとおりに基頼は備後鞆の海辺に建つ庵室に逃げ込んだ女人の夫であった。それだけではない、先に検証した「かれいの山」が実は山号であつて「可霊」と書くこと、可霊山慈眼寺の所在地が能登原坂という所であつたことなどが記されている。『福山志料』にいう基頼が中納言藤原基頼卿であることは、ほぼ間違いない。しかし、結論を急がないことにしよう。なぜならば『西備名区』には別に「慈眼寺」が立項され、「其事の跡」の委しい説明があるらしい。その条を参照してからでも遅くはあるまい。

#### 可霊山、慈眼寺廃跡

伝云。当寺は昔 淳和天皇の御后、仏乘に帰し給ひ、王宮を出て播州武庫の山に籠らせ給ひ、法鉢して如意比丘と申奉りし。後仏道弘通の爲とて西国に下り給ひ、此処に草庵を結び、如意輪観音を安置して弘法大師を導師とし供養ありて行ひすましましてませし。後、開

祖の跡をおひて尼寺となり居しが、年経て後、天文年中、中納言基頼卿の御簾中、難にあひて此寺に來り、住寺の尼を師とし、髪おろして尼となり居給ひし。基頼も此浦にうかれ來り、此浦の奉行、山名何某をたのみ住み給ひしか、程なく身まかりし時、彼尼寺の住寺、又かの忍ひ來り尼となりし基頼の室も俱に來り吊ひしに、かたみに残りし梅の絵を見て、亡者の此に有し様子を側の世話せし人に尋ね給ひしかは、其聞へしよしを、つばらに語りしにぞ、基頼の卿なる事をしりて大に嘆き、俱にたすけて慈眼寺に乞ひ葬り、跡念頃に吊ひけるが、其尼前も此比のなげきにより病おこり、是も空くなり給ひしかは、彼墓の側に葬りて、基頼卿の墓には梅を植し。是は先に梅翁居士と号せし故なり。彼尼前は戒受し時、梨春と号せしを名とし梨春大姉と号し、印に松を植えおきけるが、其後も世いまだ静かならず、寺務を執行ふ人もなくなりて荒地となり居しを、本尊并什物は医王寺に引て、跡は狐狸の栖となり、其二つの墓も山崩れ埋りて、今は跡もみへずなりぬ。其寺の跡は能登原坂なりと語伝へき〔西備名区』卷二十三・沼隈郡十二・鞆之三三〕。

これが『西備名区』の慈眼寺の記事である。

基頼が中納言藤原基頼卿であり、北の方との間の哀話がこの寺に残ることなど両寺の記事はほぼ一致するものの、慈眼寺の項に新たな、そして大きな付加があった。この寺が摂津国甲山神呪寺の開祖如意比丘尼の西下して営んだ草庵に始まる如意輪観音信仰の霊場だったという一条である。安芸国能地から夜道八里余という無理を承知のうえで『伽婢子』が基頼卿北の方のアジールを備後国沼隈半島の突端に用意した理由に、これで納得のできる説明が付いた。

かくして狐崎の如意尼伝説は辻褄が合った。しかしこれにて一件落着とするのが、何やらためらわれる。なぜであろうか。恐らくそれは、本稿にあつて少なからぬスペースを費やした中納言藤原基頼卿の正体および狐崎かれいの山の所在に関する考察との間の整合性に疑問が生じるところからであろう。藤原基頼は平安末の公家であつて、大内氏の滅びた天文年間の実在人物とする伝承になじまない。また、慈眼寺の跡を能登原坂とする言い伝えも、狐崎から三町とする『増補大道中名所鑑』の記述と食い違ふ。能登原坂は鞆町後地から沼隈町の室間へ越える峠の名称<sup>注10</sup>、つまり現在の阿伏兎隧道あたりの高台を指し、狐崎から三町とか油礁から四五町とかいう近さではない。そもそも「狐崎のかれの山」という表現は狐崎近辺を意味し、沼隈半島<sup>注11</sup>の分水嶺を指す表現ではなからう。

この不審を解消する手がかりを求めて、出発点の『福山志料』まで立ちもどつてみることにしよう。

『福山志料』の慈眼寺は「六郡志」からの引用のかたちで医王寺の条に採りあげられていた。「六郡志」とは『備陽六郡志』のことであろう。『備陽六郡志』は福山藩土宮原直仰（元禄一五〜安永五）晩年の著、その名のごとく地誌であつて『福山志料』（文化六成）あるいは馬屋原重帯（宝暦一二〜天保七）の『西備名区』等の先鞭となつた。『福山志料』の「六郡志」からの引用は短いものであつたが、『備陽六郡志』に載る慈眼寺関連の記事は二行や三行で終わる半端なものではない。その全文を引いてみよう。

桃林山慈眼院医王寺 開山如意比丘

天長年中の開基なり。本尊は石仏の如意輪観音、空海の開眼なり。天文の末に炎上して靈宝、秘記、悉焼失す。文禄年中、真養法印再造す。むかし能登原坂のふもとに慈眼寺と云寺有。当寺と一寺両寺の寺なり。

天文の比、周防山口、大内義隆か難に逢。大納言基頼といふ人、忠海にて風波にあひ、其妻慈眼寺にて剃髪し梨春と号し、梅の立枝といへる歌を詠し、ふた、ひ基頼に逢て此所に住せし事、御伽婢子に見へたり。夫婦とも身まかりて、梅翁、梨春と法号し、梅翁の墓に

は梅を植、梨春か墓には松を植けるか、其後寺務を取僧もあらねは、いつの比にや寺もなくなり、彼墓もなくなり侍り。医王寺の地中に熊野権現の社有、文治五年建立〔西備名区〕外志・分郡輞浦<sup>注12</sup>〕。

最初に医王寺自体の沿革が述べられるが、往時の医王寺は話題の豊富な寺ではなかったものか、早々に「一寺両寺」の関係にあったという慈眼寺に話題を転じ、天文の大内氏滅亡の騒乱に巻き込まれた藤原基頼卿と北の方との、この慈眼寺に因む事績が『伽婢子』に載ることを言う。

右の『備陽六郡志』の記事を踏まえて『西備名区』を検証してみよう。『西備名区』は医王寺の項と慈眼寺の項との間で慈眼寺開祖の名を相違させたり、基頼卿夫妻流転のストーリーが食い違うというご愛敬があつたりするものの、基本的には『備陽六郡志』の記述を骨子に、話の内容をさらに肉付けしたものであるという様相を呈する。すなわち『備陽六郡志』が忠海の風波・梨春尼の難髪・「梅の立枝」（和歌）・夫妻の再会と呪文まがいな訥々と羅列する言句を物語のレベルにまで還元し、さらに、狐崎の尼寺を淳和天皇の後如意尼の旧跡とすることや失意の中納言基頼卿を庇護した軼の奉行が山名某であったことなどを追加するが、そのいずれもが『伽婢子』の記すところに一致する。また、

可靈山慈眼寺というフルネームは『西備名区』が初見なのであるが、この山号も「狐崎かれいの山もと」という『伽婢子』の措辞と無縁の命名とは考えられない。つまり『西備名区』の慈眼寺関連の記事は「御伽婢子に見へたり」というコメントに導かれて『伽婢子』に取材し、ディテールを追加したうえでの『備陽六郡志』の焼き直しであつて、『伽婢子』の世界を一步たりとも踏み出すものではなかった。

ここに至つてなぜ狐崎のかれの山麓でなければならなかったのかを備後の地誌類を用いて説明しようとする試みは、『伽婢子』を用いて『伽婢子』を説明しようとする自己撞着に他ならないことが明らかになって振り出しに<sup>注13</sup>もどる。

\*

結語らしからぬ結語を述べてしまった後に、なお申し添えておかねばならないことがある。それは慈眼寺の如意輪信仰と基頼卿の哀話との関連を備後の地誌類に探し求める過程で気づいたある種の作為についてである。さりげなく仕掛けられているので、今まで見過ごされてきたのは、あるいは当然かもしれない。しかしそのまま黙認したなら

ば、悔いを将来に残すであろう種類の作為である。

具体的に指摘してみよう。仕掛けは二例を数えるが、そのうちの第一は『備陽六郡志』にある。先の引用と重複するのではあるが、当該箇所の方に絞って再度掲出し、少し詳しく分析してみる。

天文の比、周防山口、大内義隆か難に逢。大納言基頼といふ人、忠海にて風波にあひ、其妻慈眼寺にて剃髪し梨春と号し、梅の立枝といへる歌を詠し、ふた、ひ基頼に逢て此所に住せし事、御伽婢子に見へたり。

『備陽六郡志』は基頼卿夫妻の嘗めた辛酸をこのように記述する。「忠海にて風波にあひ」とは芸州忠海で海中に投げこまれて船を奪われ財宝と北の方とを失った災厄の比喩か。「梅の立枝といへる歌を詠し」とは、奪われた財宝の一つ基頼卿自筆の梅花の屏風が尼寺に施入され、梨春尼が新たに和歌を書き添えた、その和歌が評判となつて基頼を庇護する軼の奉行の耳に入り、夫婦が再会を果したことなくと、『御伽婢子』を参照することによって判明する。

「御伽婢子に見へたり」と断る右の引用はいささか粗っぽい要約ではあるものの、まさにその言のごとく、ほぼ『御伽婢子』に即している。しかし厳密を期するとき、一箇

所だけ記述に齟齬を見出す。「其妻慈眼寺にて剃髪し……」とする北の方剃髪の場合がそれであつて、『御伽婢子』では淳和天皇の御后如意尼ゆかりの寺とするのみで、固有名詞の記述はない。つまり『御伽婢子』に即して紹介したと称する『備陽六郡志』の基頼卿夫妻の哀話には、廃寺となつて跡形も留めない慈眼寺の名がさりげなくはめ込まれている。この仕掛けは『福山志料』にさらに『西備名区』にそのまま引き継がれ、何らの疑いも差し挟まれることがなかった。手口は、それほど鮮やかであつた。<sup>注14</sup>

『備陽六郡志』の《罪》は作り物語である『御伽婢子』に載る備後福山を舞台にした絵空事を備後福山の古寺跡に関連づけるべく作為を弄したことにある。ただし「御伽婢子に見へたり」の語を添えて、基頼卿夫妻の災厄一件が物語世界の出来事であると断ることを忘れなかった。この点に情状酌量の余地があらう。

仕掛けの第二は『西備名区』に存在する。『西備名区』の慈眼寺関連の記述が『備陽六郡志』の記事をベースに、これまた『備陽六郡志』の「御伽婢子に見へたり」というコメントに従い『御伽婢子』を参照しつつ物語を膨張させたものであることはすでに述べた。それゆえ『備陽六郡志』と『西備名区』の記述の間に採りあげべき相違とてあるはずもないのであるが、意外や意外、『備陽六郡志』から

『西備名区』へ至る途中に、もう一つの作為が仕掛けられていた。それは何か。両者を対照してみると、『備後六郡志』には存在したフリーズが『西備名区』には見当たらないことに気づくであろう。「御伽婢子に見へたり」というフリーズである。

翻案小説『伽婢子』は、中国元代の官人崔英とその妻王氏が中納言藤原基頼卿と北の方に姿をやつし、備後福山実是中国蘇州の圖山を舞台に活躍する物語である。それゆえ基頼は基頼であつて基頼でなく、北の方の隠れ住むかれい山麓の寺庵も備後福山に設定されているが備後福山の寺庵でない。『備後六郡志』に添えられた「御伽婢子に見へたり」というコメントは、この一話がこんな構造を持つ作り物語であることを意味する。ただしこの種の認識を当時の読者に期待するならばハイレベルに過ぎるとの誇りを免れないであろう。当時の読者が「御伽婢子に見へたり」というコメントから読み取つたのは所詮は作り物語の説くところであつて、物の本ほどの信頼性は期待できないというメッセージの程度だったかもしれない。しかしそれだけでもこのフリーズがあるとなিতでは効果が違う。『伽婢子』という縛りから解き放たれた基頼は実在の中納言藤原基頼として十五世紀の備後福山を闊歩する。そのうえ絵空事というレッテルをかなぐり捨てた基頼卿夫妻の哀話は、

「天文の比」「大内義隆」「忠海」などの語句が触手となつて慈眼庵寺という史跡や梅松を植えた墓の伝承と結合一体化し、歴史の一齣となつて備後福山の地に着床する。

『備後六郡志』の仕掛けも『西備名区』の仕掛けも深い慮りあつての所業とは思えず、せいぜい福山の古跡にやささかのもつたいを付け、もつて軀の地に彩りを加えようとした軽い出来心に発したものであろう。しかし出来心も二つ重なると、寺伝を捏造するという、とんでもない相乗効果を發揮した。そしてさらには胡散くさい置きみやげを後世に残すことともなる。

#### 医王寺 ㊦福山市鞆町後地

江浦南にあり、桃林山と号し、真言宗善通寺派。本尊薬師如来。天長年間（八二四―八三四）空海草創と伝え、文禄年間（二五九―二九六）に真養、寛文年間（二六六―一七三）に宥尊がそれぞれ再興したと伝える。「軀記」には、当寺の薬師如来への信仰が盛んで、正保年中（一六四四―四八）に後地平村の漁師が鐘を寄進したことが記されている。また、能登原（現沼隈郡沼隈町）に可靈山慈眼寺という中納言藤原基頼室の物語を伝える尼寺があつたが、天正年中（一五七三―九二）廃寺となり当寺に合したという（備後名区）。

これが置きみやげの実例であって、平凡社の日本歴史地名大系『広島県の地名』から引用した。「近世には……」以下に寺領と指定文化財について記述するが割愛した。鞆の浦の医王寺の項であって、傍線部がいま問題として採りあげてみたい箇所である。

この傍線部が『備後名区』の伝える慈眼寺に関する記事のダイジェストとして申し分のないものであることは、ここに改めて確認するまでもない。しいてあげつらえば、瑕瑾は慈眼寺の所在地を能登原とすることくらいであろうか。『備後名区』は能登原ではなく能登原坂とする。能登原は注記のごとく沼隈郡沼隈町（平成十七年の合併により現在は福山市沼隈町）の大字、そして能登原坂が峠の名であることはすでに述べた。

しかしこの場合、『備後名区』の忠実なダイジェストという評言は、けつして褒めことばではない。二つの仕掛けを鵜呑みにしたままでの、つまり史料批判を怠ったままでの紹介に終始しているからである。その結果として次のような事態もあながち否定することはできない。すなわち、この権威ある歴史地理事典に促され出典表示の導くまま『備後名区』を通読し、勅撰和歌をも織り込んだ雅びな口

マンが備後福山の地に花開いた事実を寿ぎ、『備後名区』バージョンの「中納言藤原基頼室の物語」を医王寺の門前で語る語り部が出現したりすることである。『備陽六郡志』と『西備名区』に見出した仕掛けは、受容する側の心がけ次第で、史実の創造へと発展しかねない困った仕掛けであった。

終りに、『西備名区』にもう一つの「中納言藤原基頼室の物語」の載ることを申し添えておきたい。安芸国多田の浦で海賊に襲われ、如意輪観音を本尊に祀る海浜の尼寺にかくまわれて夫婦の再会を遂げ、めでたく帰京する中納言何某卿の北の方の物語である。その正体は『続太平記狸首編』（貞享三刊）の卷三十「公家衰困事」なのであるが、本稿の論旨に直接関わないので詳説を避けた。

注1 松田修・渡辺守邦・花田富二夫『伽婢子』（新日本古典文学大系七五 二〇〇一 岩波書店）。

2 『本朝将軍記』巻第十「京都第十三代 源義輝」（第十冊二十五ウ）。

3 福尾猛市郎氏『大内義隆』（平成九 吉川弘文館）。

4 金井弘夫氏『新日本地名索引』第一巻（一九九三 アポック社出版局）。

5 岡山大学附属図書館池田家文庫蔵、三つ切横小本一冊



(函架番号、P二九／一六)。書名は後補の書題簽による。

本書は道中記二冊の合綴らしく、前半(二／八十七丁)は通常の『江戸道中記』(上り)であって末に「延宝六年正月吉日／江戸大工町式丁目／和泉屋善五郎／四条大和橋上ル大こく町／堺屋庄兵衛板」の刊記が備わり、三井文庫の『増補江戸道中記』(高陽／二〇三七)と同版。後半は「西国船路道中記」(一／三十七丁)「伊勢道中記」(二／廿一丁)「中山道馬次」(二／二丁)「北国道中名所鑑」(二／三丁)を内容とし、これにも「延宝七」<sup>末</sup>年／八月吉日／なわて三条下ル新五けん町西がわ／堺屋庄兵衛板」という刊記がある。

- 6 『諸国案内旅雀』巻七「西国船路道中記」(吉田幸一・倉島須美子氏「諸国案内旅雀」平成一四 古典文庫)。引用文は同書<sup>434</sup>ページ。
- 7 拙稿「寛永期の〈知恵蔵〉たち」(『文学』隔月刊第一巻第三号)

- 8 『福山史料』(一九六八 福山史料刊行会)。

9 『備後叢書』七所収。『備後叢書』は得能正通氏編、昭和三／一〇、備後郷土史会発行(一九七〇 歴史図書社覆刻)。

- 10 斉藤倉男氏『沼隈郡沼隈町地名誌』(沼隈半島地名史一、昭五六 沼隈町文化財協会)に「能登原坂 サカは境のサカで村落の境のタオを意味するもので、軛との境にあ

る峠をいったものである」とする。

- 11 慈眼寺を『福山志料』に「能登坂の下」とし、『備陽六郡志』に「能登原坂のふもと」とする。峠の麓とか坂の下ならばぐつと海岸に近づくが、そんなことを根拠に能登原坂イコールかれいの山とするのは安易に過ぎるであろう。海人がランドマークに選ぶのは、山・岬・一つ松・大岩など突出あるいは屹立するものであって、遠目や曇天には識別したい峠とか坂道などではない。また「能登坂の下」「能登原坂のふもと」は日常を陸上に過ごす者の地理感覚であって、岩礁の恐ろしさを実感する海人とは意識の次元を異にすることにも留意すべきであろう。

- 12 『備後叢書』八所収。
- 13 如意尼ゆかりの寺庵が狐崎のかれの山麓に設定された理由は疑問のままに残るのであるが、今の段階で贅言を加えることが、もし許されるならば、『摂州甲山神呪寺略縁起』に載る次の一条を指摘しておきたいと思う。

一、本尊如意輪観音は理智不二微妙牀の深理を以、弘法大師作り給ふ。尤七難三毒を払ひ就中船中風波の難を救ひ、女人済度の誓ひ新なる霊像なり(築瀬一雄氏『社寺縁起の研究』一九九八 勉誠社)。

神呪寺の略縁起に、本尊の如意輪観音が船中風波の難や女人済度に靈驗あらたかであることを言う。人里離れた海浜に仏の加護を受けつつ基頼卿を想う日々を送った上臈の住まいとして、如意輪信仰に支えられたこの寺庵がうってつけの舞台であったことは言うまでもあるまい。しかしそれとても備後国沼隈郡平村（福山市鞆町後地）の狐崎のロケーションが選ばれた理由を十全に説明し切っているとは思えない。

14 『備陽六郡志』が慈眼寺の名を何に基づいたのか、あるいは、そもそも福山に慈眼寺という廃寺があったものか否かは明らかでない。福山市中央図書館のレファレンス係を中継して頂戴した鞆の浦歴史民俗資料館の示教によると、『伽婢子』にいう「かれいの山」の麓の尼寺は不明、阿伏兔の観音に至る、今は使われない海沿いの道に寺があったという言い伝えがあるが、この寺も詳細は不明とのことであった。

15 『広島県の地名』（日本歴史地名大系三五 一九八二平凡社）324ページ。

追記 本稿をなすに当り、福山市中央図書館と鞆の浦歴史民俗資料館から福山市周辺の地名と伝承について、海上保安庁海洋情報部の相談室から瀬戸内海の高図について示教を受けた。ともに深謝する次第である。

また文中に掲げた地図のうち〔図版1〕は国土地理院の二万五千分の一地図「鞆」「常石」を七十一パーセントに縮めて利用し、〔図版2〕は同二万五千分の一地図の電子版を利用した。

本稿は実践女子大学で開催された平成二十二年度日本近世文学会春季大会での発表に基づく。その折りご意見を賜った方々にお礼を申し上げたい。とくに風間誠史氏は伊那市の開善寺に伝わる昔話を教えてくださり、ご論考「伽婢子と伊那市開善寺」（日本文芸協会「近世部会会報」一九七九・秋）のコピーを後日お送りくださった。『伽婢子』の享受・受容についての研究の必要性を強調するご論考である。この点は、しかし、『続太平記狸首編』のケースをも含めて考えてみたいと思うので、今回はペンディングとした。

（わたなべ もりくに・実践女子大学名誉教授）